メシーカ征服活動と石彫モニュメント

—旧大司教館の石とティソックの石—

小　林　致　広

はじめに

『メンドサ絵文書（Códice Mendocino, 以下 CM)』第1部などの絵文書にあるメシーカ（los mexicas）の歴代領主の軍事征服の記録は、すべて植民地期に作成されたものである。そのため、先スペイン期の資料が忠実に転写されていたとしても、征服された町を示す地名絵符が正しく表記され、解読されているとはかぎらない。CM の地名絵符に関しても、付されたスペイン語地名が誤っているものがいくつかある。メシーカの帝都テノチティトラン（Tenochtitlan）陥落 20 年後に CM が作成されたことを考えれば、アルファベット表記に誤読や注記ミスがあっても不思議ではない。しかも、先スペイン期の絵文書資料の地名絵符が、植民地期に作成された絵文書資料と同じ様式で作成されていたとは断定できない[1)]。

先スペイン期のメシーカの地名絵符については、石彫モニュメントや土器などに描かれた絵符などから類推するしかない。しかし、マヤ文化圏と異なり、メシーカの非絵文書資料で地名絵符が描かれている事例は乏しく、現在のメキシコ市中央広場ソカロ（zócalo）地区にあった大神殿地区（Templo Mayor）から発見された二つの石彫モニュメントに限られているといってよい。この二つの石彫モニュメントの征服事業を描いたコラムには、征服された民族集団、または町を示す絵符が刻まれている。

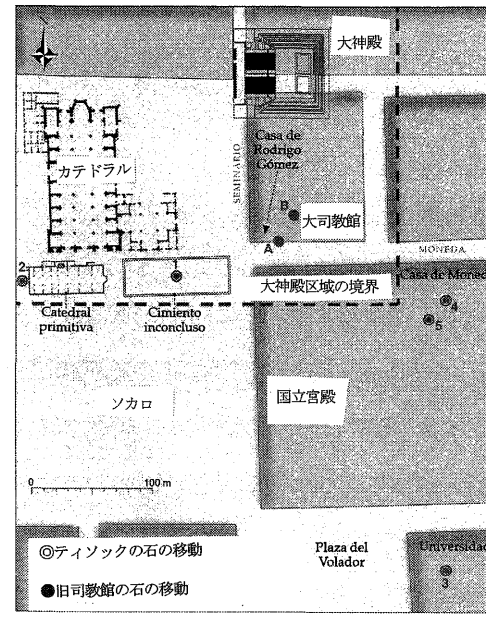
本稿では、メシーカの征服事業という歴史的な文脈にこの二つの石彫モニュメントを位置づけ、そこに刻まれた地名絵符について新しい解釈の可能性を提示したい。

I　大神殿地区で発見された二つの円盤状石彫モニュメント

現メキシコ市のソカロは帝都テノチティトランの大神殿テオカリ（teocalli）があった地区である。廃墟に建設された植民地都市メキシコ市はヌエバ・エスパーニャ副王領の首都となり、ソカロには大聖堂や副王宮殿、市議会庁舎などが建設された。現在まで、この地区からは先スペイン期の遺構や遺物が多数発見されている（地図1）。

1790年、「アステカ暦石（Calendario Azteca）」として知られる「太陽の石（Piedra del Sol）」とコアトリクエ巨像（Coatlicue）が副王宮の南東隅から発見された。翌年12月には、本稿の分析対象の一つであるティソックの石（Piedra de Tízoc、写真1B）が大聖堂構内の南東部で再発見[2]された。しかし、大神殿地区の本格的な学術発掘調査が始まったのは、1978年2月末の月の女神「コヨルシャウキ（Coyolxauhqui）の円盤」の発見が契機であった（小林 1982）。現在では、大聖堂東側と国立宮殿北側に接する区画に大神殿の一部が復原され、遺構の一部を見学できる。もうひとつの分析対象である旧大司教館の石（La Piedra del Ex-Arzobispado、写真1A）は、1988

地図1：大神殿地区の2つの石の発見場所



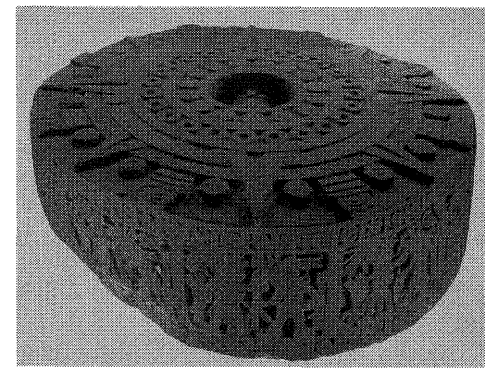


写真1A：大司教館の石

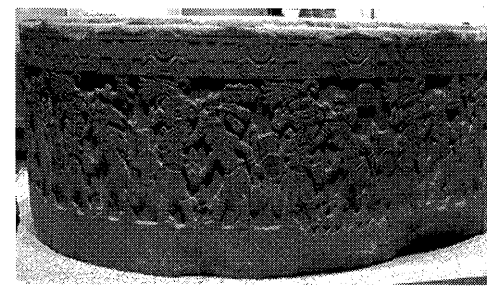


写真1B：ティソックの石

年に旧大司教館区の発掘調査で発見されている。その後も、「赤の神殿（Templo Rojo del Norte）」、「鷲戦士の館（Casa de las Águilas）」などで発掘調査が行われ、2006年10月には、大神殿第Ⅵ期（1486～1502年）遺構からメシーカの石彫モニュメントで最大とされる大地の神トラルテクートリ（Tlaltecuhtli）が発見されている（Moctezuma y López Luján et al. 2010）。

1. 旧大司教館の石

1988年7月、大神殿地区の旧大司教館跡の発掘調査中、ティソックの石に似た石彫モニュメントが発見された。この円筒状の石彫モニュメント（直径2.14m、高さ68～76cm）の材質は玄武岩である。征服者ロドリゴ・ゴメスの館の東側に建設された旧大司教館[3]は、大神殿南側のテスカトリポカ神殿（Templo de Tezcatlipoca）に隣接する場所に位置していた。発見場所に因み、石彫モニュメントは旧大司教館の石と呼ばれるが、製作を命じた領主に因み、モテクソマⅠ世の石（La Piedra de Moctezuma I）、あるいはアシャヤカトルの石（La Piedra de Axayácatl）と呼ばれることもある[4]。

モニュメント上面部の中央の窪みにある神格は、「アステカの暦石」の中央の神格の顔と似ている[5]。発掘調査者はこの神格を火の神シウテクートリ（Xiuhtecuhtli）と同定している。上面外周にある二つの環の内側には15の円、外側には24の二重円（内側は窪み）が配列されている。外側の環から太陽光線を示すΛ状の突起が外周まで4つ伸び、中間から4つのΛ状の突起が突き出ている。8つの突起の間に四角形状の突起が8つあり、16の突起の間には二重円（線刻）が配置されている。このモチーフは、1831年に発見された「聖戦の神殿（Templo de Guerra Sagrada）」の正面上部に描かれた太陽の図像や「アステカ暦石」の中央の太陽の王環とほぼ同じである。いずれにせよ、石彫モニュメント上面の図像が太陽神を表現することは確実である（写真1A）。

旧大司教館の石の側面は3層で構成されている。上層の59枠と下層の57枠には同じ種類の絵符が描かれている。描かれている絵符は、王冠（copill、xihuitzolli）、円のある掌、束ねられた4本の棒、環の中の交差した十字、交差した骨、心臓、頭蓋骨、十字と交差する環、大地を表すワニの頭、石刀（tecpatl）の10種類とされている（図2A）。切断された掌、交差した骨、心臓、頭蓋骨、石刀などは、人身犠牲の儀礼と関連

した絵符である。その配列は上下層で異なり、明確な規則性は見つけ出せない。

中層に描かれている征服シーンのコラム数は11である[6]。枠で囲まれた各コラムの左側には征服者のメシーカ戦士が描かれ、右側には頭髪を掴まれた敗者側戦士が描かれている。敗者側の出身地を示す帰属絵符は、右側戦士の頭の右上に配されているが、2つの例外がある。第1コラムでは、左右の戦士の間の上部、そして第5コラムでは、両者の中央下部に、敗者側に関連する帰属絵符が描かれている。また、上記の王冠の絵符は征服シーンの第1コラムの上だけにあり、このコラムが特別の意味をもつことを示唆している[7]。

旧副王宮の石は、テマラカトル（temalácatl）、またはクアウシカーリ（cuauhxicalli）と見なされてきた[8]。テマラカトルは、トラカシペウァリストリ（tlacaxipehualiztli）の月[9]の儀式などで、ジャガーの戦士や鷲の戦士と戦う戦争捕虜を繋ぎ止める円形の石だった[10]。しかし、旧大司教館の石の上面中央部の窪みにあった捕虜を繋ぎ止める紐を結わえる石の環は度重なる使用で壊れ、その部分に太陽神の顔が彫られ、生贄の心臓や血を容れるクアウシカーリに転用されたと推測される（Padilla et al. 1989）。

2. ティソックの石

1791年12月、大聖堂南側の共同墓地の暗渠工事中に再発見された円筒形状のティソックの石（直径2.6m、高さ88cm）は、焦げ茶色の玄武斑岩である。上面には旧大司教館の石とほぼ同じモチーフの太陽の王環が描かれている[11]。上面の中央の直径47cmの窪みに神格の図像は刻まれていない。この窪みの存在から、ティソックの石は犠牲者の心臓を入れる容器クアウシカーリと解釈されてきた。窪みから外側に向かう溝は、植民地期に洗礼容器として利用された際に掘られたものである（図1A）。

ティソックの石の側面は、上部の天空、中間の征服シーン、下部の大地の3層で構成されている。上層には、星を示す一対の目のようなシンボル、金星を示す半円形のシンボルが交互に20組描かれている。このシンボルの組み合わせは、モクテスマI世の諡名であるイルウィカミナ（ilhuicamina= 天空を射る人）を示す人名絵符を構成する天空の絵符とよく似たものである。一方、下層には8つの生贄儀式用の石刀を並べた列が4つ描かれている（図2B）。8つの石刀の列は、ワニに似た神話的動物シパクト

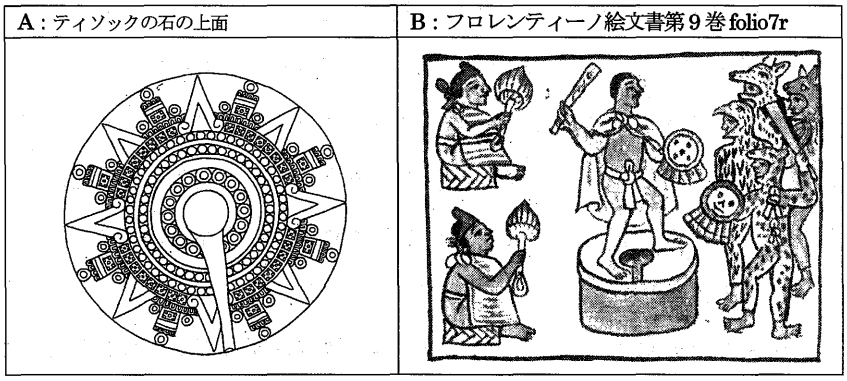


図1：ティソックの石の上面のモチーフと溝

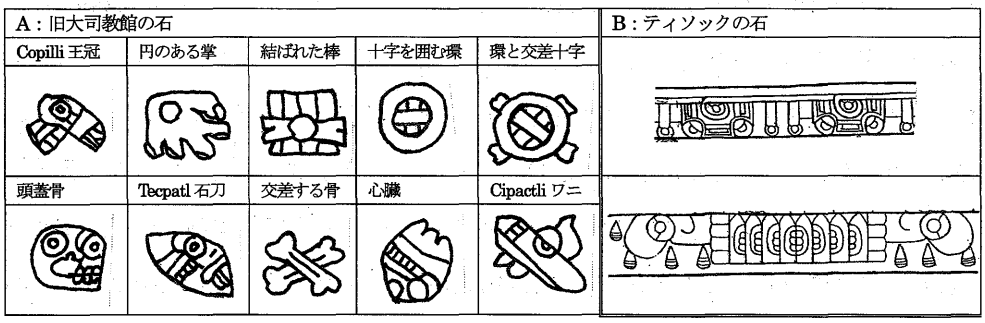


図2：二つの石の側面上下層の絵符

リ（cipactli）の歯列で表現される大地の神トラルテクートリの歯列である。この歯列は地下世界への入口を表し、4つの歯列は東西南北の基軸に対応すると思われる。

側面の中層に征服シーンを描いたコラムがある。各コラムは旧大司教館の石のような方形の枠で囲まれてはいないが、左に征服者を表す神格、右に被征服者を代表すると思われる神格の衣装をまとった戦士が描かれている。そのひとつにメシーカの第7代領主ティソックの人名絵符あるため、この石彫モニュメントはティソックの石と呼ばれてきた。ティソックの石の征服シーンのコラムは、旧大司教館の石の11に4つ加わり、15となっている。征服シーンのコラムについてはⅢ章で詳しく検討する。

3. 先スペイン期の円盤状石彫モニュメント製作に関する年代記史料

二つの石彫モニュメントに関する記述は、ドミニコ会士ドゥラン（Diego Durán）の『ドゥラン年代記』[12]、先住民年代記作家アルバラード・テソソモック（Hernando de

Alvarado Tezozómoc）の『メシカーナ年代記』など「クロニカ X（Crónica X）」系年代記などに見出せる。これらの年代記では、第5代モクテスマ I 世（Moctezuma I、1441 ～ 1469 年）、第6代アシャヤカトル（1469 ～ 1481 年）、第7代ティソック（1481 ～ 1486 年）の統治期に、クアウシカーリ、テマラカトル、太陽の石（piedra del sol）、生贄を載せる台座テチカトル（téchcatl）が製作されたという記述がある。

(1) モクテスマ I 世統治期

メキシコ中央高原東北部ワステカ（Huaxteca）地方の征服事業が行われていた 1450 年前後、モクテスマ I 世はテマラカトル製作を命じている。『ドゥラン年代記』によると、メシーカの先祖がテパネカ（tepanecas）の盟主アスカポツァルコ（Azcapotzalco）から覇権を奪った戦いを記憶にとどめるため、征服の様子が彫られたという。この石彫モニュメントは植民地期に大聖堂の洗礼用水盤として使用され、直径は 1.5 ブラサ（約 2.5m）だったという（Durán 1967: II,171）。モニュメント完成式典では、メシーカ戦士がテマラカトルに片足を結びつけられた捕虜と戦う儀式と生贄の皮剥ぎの儀式が執行された。ワステカ地方のトチュパン（Tochpan）の人々が生贄となり、摘出された心臓は別のクアウシカーリに置かれたという（Durán 1967: II,172-174）。

一方、『メシカーナ年代記』では、メシーカの征服事業を開始した第3代チマルポポカ（Chimalpopoca、1418 ～ 1428 年）の偉業を讃えるため、円盤状の石の厚盤（taxón）の製作が命令されたとなっている。アスカポツァルコやコヨアカン（Cuyuacán）の石工が製作に当たり、2年で完成したという（Alvarado Tezozómoc 1997: 153-154）。石の厚盤は、ウィチロポチトリ神殿（Templo de Huichilopochtli）の神像の向いに据えられた。トラカシペウァリストリの月に挙行された大神殿と石の厚盤の完成式では、テマラカトルに結ばれた捕虜との戦いがあり、クエトラシュトラン（Cuetlaxtlan）やトゥスパン（Tuxpan）の捕虜が生贄にされた（Alvarado Tezozómoc 1997: 154）。

『ドゥラン年代記』と『メシカーナ年代記』の記述の間には微妙な違いがある。石彫モニュメントの顕彰対象が、前者では第4代イツコアトル（Itzcoatl、1428 ～ 1440 年）のアスカポツァルコ征服となっているが、後者では第3代チマルポポカによる征服となっている。また、アスカポツァルコという地名は、前者では征服戦争の対象地として、後者では石彫モニュメント製作に携わった石工の出身地とされている。原史料と想定

される絵文書資料「クロニカ X」の解読で、異なった解釈が行われたものと思われる。

1458 年、現オアハカ州北部ミシュテカ高地コアイシュトラウァカ（Coayxtlahuaca）の戦争捕虜を生贄にするため、太陽の像のあるクアウシカーリを製作することをモクテスマ I 世が命じている[13]。『ドゥラン年代記』によると、クアウシカーリの側面には、テペアカ（Tepeaca）、トチュパン[14]、ワステカ、クエトラシュトラン、コアイシュトラウァカなどの征服の様子が描かれていたという（Durán 1967: II,191）。一方、『メシーカナ年代記』によると、生贄儀式用のテオクアウシカーリ（teocuauhxicalli、神のクアウシカーリ）が大神殿上部に設置されたという。この石彫モニュメントのモチーフは不明だが、「火の御子、鷲皮をまとったもの」を意味するシウピリ・クアウトレエウァトル（xiuhpilli cuauhtleehuatl）神のための儀礼が執行され、オアハカやコアイシュトラウァカの戦争捕虜が生贄にされた（Alvarado Tezozómoc 1997: 166-167）。いずれにせよ、モクテスマ I 世統治期、生贄儀式に関連するクアウシカーリとテマラカトルという 2 種類の円盤状石彫モニュメントが製作されていたのである。

(2) アシャヤカトル統治期

メキシコ盆地の西にあるトルーカ盆地のマトラツィンカ（los matlatzincas）居住域で征服事業が展開されていた時期、アシャヤカトルは太陽の石の製作を命じたとされている。この地域の征服活動は 1470 年代から始まり、1474 年にはトルーカ（Toluca）、1477 年にはカリマヤン（Calimayán）が征服されている。

『ドゥラン年代記』によると、太陽の石には、太陽光線が彫られ中央に窪みのある人身犠牲執行用の石と、「年・月・日・週のシンボル」が彫られている石という 2 種類があったという（Durán 1967: II,268）。前者には、勇敢なメシーカ戦士、海岸地方など遠隔地の征服の様子が彫られていたとされ、本稿の二つの石彫モニュメントに該当する可能性がある。一方、後者はアステカの暦石に該当するとみていいだろう。

一方、『メシーカナ年代記』によると、大神殿の増改築事業の過程で古いクアウシカーリの更新が行われることになったという。その時期は、1469 年にトラテロルコが征服された後、マトラツィンカ族居住域で征服活動が展開していた時期となっている。大神殿上部にあったモクテスマ I 世時代に製作されたクアウシカーリは漆喰を塗られ、記念物として大神殿の向い正面にあった神殿の基部に据え付けられたという[15]。この

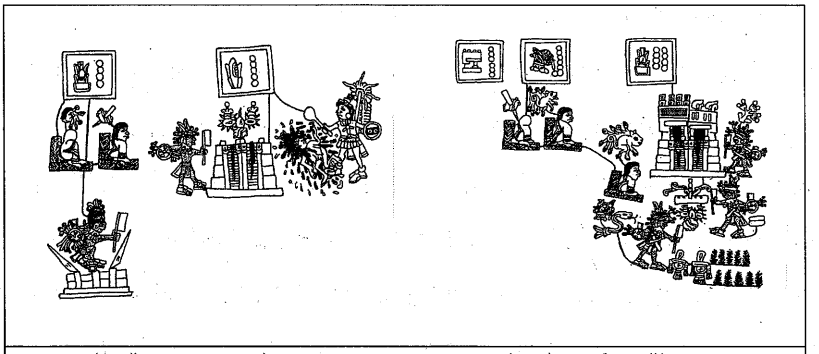
古いクアウシカーリは、かつてモクテスマⅠ世が製作を命じたテオクアウシカーリと思われる。アトツィンゴ（Atotzingo）から運ばれた石材が運搬中にテスココ湖に沈んだため、コヨアカン山中から切り出したより大きな極上の石材で同じ形式のクアウシカーリを造ることになったという（Alvarado Tezozómoc 1997: 214-215）。

メキシコ中央高原西部のタラスカ（los tarascas）との戦いが始まった頃、大神殿の台座の160エスタードの場所に、「20ブラサ四方、高さ8エスタード」のクアウシカーリが据えられることになったという（Alvarado Tezozómoc 1997: 225-227）。1479年には、テマラカトルとクアウシカーリの完成式典で生贄にする捕虜を確保するため、ワステカ地方に隣接するトリリゥクィテペック（Tliliuquitepec）で花戦争[16]が行われたという。アシャヤカトル統治期、重たい石を加工した円盤状のクアウテマラカトルはクアウシカーリとともに完成したと思われる（Alvarado Tezozómoc 1997: 238）。

(3) ティソック統治期

『メシカーナ年代記』によると、1481年即位のティソック[17]は、大神殿改築事業の一環として、生贄を横たえるためのテチカトルという「中程度の大きさの細工を施された厚い石盤」の製作を命じたという（Alvarado Tezozómoc 1997: 261）。本来、生贄の心臓の摘出儀礼を執行する台座のテチカトルは大きなものではないが[18]、『メシカーナ年代記』で言及されているテチカトルは、ティソックの石に該当するという意見もある（Graulich 1992）。この厚い石盤がティソック統治期に完成したかは不明だが、1487年の大神殿改築落成式には、他の石彫モニュメントとともに厚い石盤が完成していたことは確実である[19]。

一方、『テレリアーノ・レメンシス絵文書（Códice Telleriano Remensis、以下CTRと略記）』の1483年欄には、生贄儀礼のための聖なる石（piedra sagrada）の製作の様子が描かれている（図3）。下部のスペイン語注釈によると、「最初の石」を大神殿に据える作業があったとしている。1484年の欄には、大神殿台座で執行されたトルーカ盆地のツィナカンテペック（Tzinacantepec）の捕虜の生贄儀式の様子が描かれているが、ウィチロポチトリとトラロックの双子神殿は大神殿台座に描かれていない。しかし、4年後の1487年の欄には、完成した双子神殿の完成式で執行された大規模な生贄儀式[20]が描かれている。



Folio 38v（4の芦　5の石刀）　Folio 39r（6の家 7の兎 8の芦）

図3：『テレリアーノ・レメンシス絵文書』の生贄儀式

Umbergerは、ティソックの石は1484年と1487年に大神殿で行われた生贄儀式で使用されたと推測している（Umberger 2008: 88-90）。つまり、CTRで言及された1483年の聖なる石はティソックの石であるという見解である。これが『メシカーナ年代記』で言及されたティソックが製作を指示したとされるテチカトルであるとは即断できない。

第8代アウィツォトル（Ahuítzotl、1486～1502年）統治期以降も、円盤状の石彫モニュメントに関する記述を確認できる。アウィツォトルの遺体はクアウシカーリの近くに埋葬[21]されたという（Durán 1967: II,395）。また、第9代領主モクテスマII世（1502～1520年）は、先祖が製作したモニュメントはメシーカの偉大さを誇示するには貧弱であるとして、巨大なテマラカトルの製作を命じたという（Durán 1967: II,485）。

いずれにせよ、クアウシカーリやテマラカトルという円盤状の生贄の石は、歴代領主の即位や大神殿の拡張にともない製作・更新されてきた（表1参照）。

表1：円盤状石彫モニュメントに関する年代記の記述

年代	史料	名称	記述内容
1455年	D	temalácatl	アスカポツァルコとの戦争、直径約2.5m
	CM	tajón	チマルポポカの偉業
1458年	D	temalácatl	歴代領主の征服
	CM	teocuauhxicalli	シウピリ・クアウトレエウァトル儀礼、オアハカの捕虜生贄
1460年頃	HP	「石製の楯」	捕虜を結ぶ石の環、ロドリゴ・ゴメスの館に埋設
1469年頃	CM	cuauhxicalli	コヨアカンの石材で新しいクアウシカーリの製作指令
1470年代	D	「太陽の石」2種	海岸・遠隔地の征服の様子＋年・月・週・日のシンボル
1480年頃	CM	cuauhxicall, cuauhtemalácatl	新しいクアウシカーリを大神殿に設置
1481年	CM	téchcatl	ティソック即位式で大神殿にツィツィメ像とともに設置
1483年	CTR	「聖なる石」	ティソック即位にともない大神殿に設置
1502年	D	cuauhxicalli	その近くにアウィツォトル王を埋葬
1520年頃	D	temalácatl	メシーカの栄華誇示のモニュメント製作命令

D：『ドゥラン年代記』、CM：『メシカーナ年代記』、HP：『絵文書によるメシーカ人の歴史』
CTR：『テレリアーノ・レメンシス絵文書』

4. 植民地初期の円盤状石彫モニュメント目撃記録

円盤状の生贄の石はいくつも造られているため、各種の年代記で言及されている個々のクアウシカーリやテマラカトルが、本稿で扱っている二つの石彫モニュメントのいずれに該当するかを判断することは難しい。手がかりとなるのは、征服直後から植民地期初期に作成された年代記などに記述されている円盤状石彫モニュメントの目撃記録である。その種の記述は、「クロニカ X」系年代記のほか、『絵文書によるメシーカ人の歴史』、『クリストバル・デル・カスティージョ年代記』などに見出せる。

(1)『ドゥラン年代記』における目撃証言

『ドゥラン年代記』のアシャヤカトル統治期の記録では、遠隔地の征服の様子が彫られたものと、「年・月・日・週のシンボル」が彫られたものの2種類の石彫モニュメントがあったとされる（Durán 1967: II,268)。一方、『ドゥラン儀礼記』のトラカシペウァリストリの月の儀礼について記述した箇所で、「太陽の図像の彫られた石」と「年、月、日を計算する石」の2種類があったとされている（Durán 1967: I,100)。2種類の円盤状石彫モニュメントはどちらも生贄の石として使用されていたとされる。

『ドゥラン儀礼記』において「年、月、日を計算する石」とされている生贄の石は、植民地期当初、メキシコ市の大広場にあったが、第2代メキシコ大司教モントゥファル（Fray Alonso de Montúfar、在任 1551 - 73 年）の命令で撤去されたという（Durán 1967: I,100; II,268)。この「年・月・日を計算する石」、あるいは「年・月・日・週のシンボル」が彫られた石彫モニュメントが、「アステカ暦石」であることは、前述したように、ほぼ確実であると言ってよい。しかし、それは生贄儀礼で使用されていたテマラカトル、クアウシカーリのカテゴリーには該当しない。

一方、『ドゥラン儀礼記』の「太陽の図像の彫られた石」とされる生贄の石は、メキシコ市主教会（Iglesia Mayor de México、初期大聖堂）の「許しの門」(Puerta de Perdón)の前に置かれていた。この石を実見したドゥランは、上面に太陽光線が描かれ、中央に聖水盆があり、血が流れる溝があると述べている（Durán 1967: I,100; II,268)。この記述は、窪みから外周に向かう溝があるティソックの石（図 2B）と符合するものである。この溝自体は植民地初期に掘削されたもので、先スペイン期にこの溝はなかった。サアグンの情報提供者が作成した『フロレンティーノ絵文書』9巻のテペシウァ

リストリの儀礼のイラストには外周に向かう溝がはっきりと描かれ、イラスト作成者は植民地期のティソックの石に基づいて描いたと思われる（図 1B）。

(2)『絵文書によるメシーカ人の歴史』の記述

一方、1543/44 年頃に作成された『絵文書によるメシーカ人の歴史』によると、モクテスマ I 世は、テノチティトラン創設から 136 年目、つまり 1460 年前後に、石製の楯（rodela de piedra）の製作を命じたという。この石製の楯は、征服者ロドリゴ・ゴメスの館の入口に埋められたとされる。石製の楯の中央には、戦争捕虜を結び付けるための石の環があった。環に結び付けられた捕虜には楯と棍棒が与えられ、ジャガー、ライオン、鷲の戦士の衣装をまとったメシーカ戦士と戦っていたという。この石製の楯がテマラカトルであったことは明白で（Tena 2002: 72）、『絵文書によるメシーカ人の歴史』における石製の楯は、旧大司教館の石に対応している可能性が高い。

『絵文書によるメシーカ人の歴史』によると、この石製の楯以外にも、歴代メシーカ領主によって別の二つの石が製作され、先代領主が製作していた二つの石の上に積み重ねられたという。スペイン人到来時、別の二つの石は大神殿から引き剥がされ、一つは「洗礼水盤の下に置かれ」、もう一つの石は火を放たれ破壊されたという（Tena 2002: 72-73）。前者の破壊されずに「洗礼水盤の下に置かれた」とされる石は、ティソックの石に該当する可能性は極めて高い。別の二つの石に関する『絵文書によるメシーカ人の歴史』の記述は、『メシカーナ年代記』に記載されたクアウシカーリの更新という記述とも符合する。

(3)『クリストバル・デル・カスティージョ年代記』

1598/1600 年頃作成の『クリストバル・デル・カスティージョ年代記』には、「メシティン（mecitin、メシーカのこと）が征服したすべての場所を見ていくことにしたい。それらはメキシコ市の主教会の脇にある円筒形の石テマラカトル、線刻された石に記録されている」という記述がある。さらに、この石に刻まれたレリーフに関して次のような記述が続いている。

「もう一人の頭髪を掴み立っている人物はメシティンの像である。前傾姿勢の人物は征服された場所の人間で捕虜である。各集落の名称は石の上部に彫られている。円盤状の石の肩を取り巻くように場所の名前が彫られている。しかし、それが我々の場所

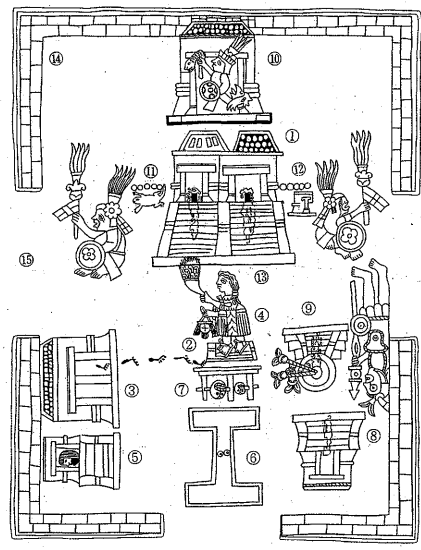
の名前であることを誰も知らない。石に刻まれた絵符の歴史を知っていた人はいなくなったからである（Cristóbal del Castillo 1991: 136-137）。」

本稿の二つの石にもこの特徴は見られるが、いずれかを確定するのは難しい。『絵文書によるメシーカ人の歴史』で言及された石彫モニュメントと1450年代や1458年に関する記録で言及された石彫モニュメントが同一であるか否かも、判然としない。

(4) 大神殿地区における二つの石彫モニュメントの場所

年代記作家やサアグンの情報提供者の先住民たちの証言から、16世紀末まで「太陽のイメージの彫られた石」が初期大聖堂の入口におかれていたことは明白である。『ドゥラン儀礼記』には、トラカシペウアリストリの月に執行された「剣闘士の生贄」に関する記述があり、生贄執行の場所はクアウシカルコ、つまりクアウシカーリの場所と呼ばれ、7～8ブラサ（約11.7～13.4m）四方の広さだったとされる。漆喰塗りの台座には、1ブラサ間隔でテマラカトルとクアウシカーリが設置されていたという（Durán 1967: I,98-100）。

一方、サアグンの『初稿記録（Primeros Memoriales）』には、大神殿地区トラカテクロカルコ[22]にあった建物群を描いた絵図（folio268v/269r）がある（図4）。Folio 268vは注釈、Folio 269rは絵図となっているが、注記と絵図の対応関係は明示されていない。注記の2番目がクアウシカーリ、9番目がテマラカトルとされ、『初稿記録』



① Teucalli：神の館
② Quauhxicalli
③ Calmecatl：カルメカック（神官学校）
④ Yxmomoztli：正面の祭壇
⑤ Quauhcalli：鷲の館
⑥ Teutlachtli：聖なる球技場
⑦ Tzumpantli：ツォンパントリ（頭蓋骨展示台）
⑧ Yopico teucali：ヨピ神殿
⑨ Temallácatl
⑩ Colhuacan teucalli：コルワカン神殿
⑪ Macuilcuetzapalli：5つの蛸鰐
⑫ Macuilcalli：5つの家
⑬ Ytpalli：宮廷広場
⑭ Couatenamitl：蛇の壁
⑮ Teuquiyaotl. Yc exca callacovaya：聖なる回廊。三カ所への入口

図4：『初稿記録』の大神殿区建物群

の注釈と絵図に関するSelerの解釈（Seler 1960: II,769-786）は妥当なものとされてきた（Couvreur 2002）。

Selerは、クアウシカーリに該当する建物は大神殿テオカリの下部に描かれた神官の載った台座（図4番号②）と推定している（Seler 1960: II,778）。一方、4番目の注記のモモストリは「正面にある祭壇」という意味で、字義どおりに解釈すると、Selerがクアウシカーリと推定した台座に該当する。しかし、注記のモモストリは特定の神殿の名称でなく、位置関係を示すものと考えられる。一方、注記のテマラカトルは、「正面にある祭壇」の右にある戦争捕虜が結わえられた神殿（図4番号⑨）を指すことは明白である。

『初稿記録』に描かれたクアウシカーリやテマラカトルに置かれていた石彫モニュメントが、本稿の二つの石彫モニュメントのどれに該当するかを判断することは難しい。クアウシカーリのある建物が大神殿地区に複数存在していたからである。サアグンの『フロレンティーノ絵文書』第2巻の大神殿地区の建物群一覧には78の建物が記載され、クアウシカルコとして5つの建物がある（Sahagún1988: I,181-189, López Austin 1965）。8番目はウェイ・クアウシカルコ（大クアウシカルコ）という名称が付き、15、16、25、36番もクアウシカルコとなっている。8番は太陽神、15番はテスカトリポカ、16番はテオトレコ（teotleco）の月、25番はオマカトル（Omacatl）、36番はシウコアトルと、それぞれの祭神や儀式内容は異なっている。大神殿地区建物群に関する復原図では、8番は太陽神トナティウ神殿、15番は黒のテスカトリポカ神殿に対応している可能性が高い。

「クロニカX」系の年代記で言及された円盤状の石彫モニュメントが、本稿で扱っている二つの石のいずれに該当するかは判断しにくい。ティソックの石がティソック統治期に製作されたことはほぼ確実だが、クロニカX系の年代記では、ティソック統治期にクアウシカーリやテマラカトルが製作されたことは確認できない。ドゥランが大聖堂の洗礼式用水盤として転用されたと報告しているクアウシカーリには、メシーカのテペアカなどの征服事蹟が彫られていたというが、既往の研究では二つの石にあるメシーカに征服された地域や町の帰属絵符でテペアカと同定されたものはない。既往の研究の帰属絵符の解読が不十分なのか、植民地期の年代記作家に情報提供した人物の誤読を想定するべきかについては判断できない。

Ⅱ　二つの石における征服シーン

旧大司教館の石とティソックの石の側面にある征服シーンのコラムは、前者が11、後者が15となっている。ティソックの石では旧大司教館の石のコルウァカンとクエトラシュトランのコラムの間に4つのコラムが付加されているが、二つの石に共通する11のコラムの配列順序は同じである。各コラムの右上隅や中央上下部に描かれている敗者側の帰属絵符の描き方に微妙な差があるが、基本的には同一場所を示すとみなすべきである[23]。戦闘シーンには二つの石の間で微妙な差はあるが、左に征服者、右に敗者が配置される構図は同じである。前述のように、コルウァカンのコラムをコラム1とし、反時計回りに順序を付け、クエトラシュトランのコラムをコラム11とする。ティソックの石でティソックの人名絵符があるコラムを12とし、反時計回りに13, 14, 15と順序をつける。

1. 征服者側の戦士

二つの石における征服者側戦士はほぼ同じ姿で描かれている。征服者の右手は武器を握り、左手は敗者側戦士の前頭部の髪の束を掴んでいる。敗者側戦士の前頭部の髪の束を掴む格好は、軍事征服を示す表現として、ミシュテカ文化圏、マヤ文化圏の石彫モニュメントや土器、絵文書でも多く描かれている。CM第Ⅲ部の民族誌（CM Ⅲ）folio64・65の征服活動を記述した箇所にも、同じ構図で征服者が敗者の頭髪を掴む様子が描かれている。矢と楯を組み合わせたミトル・チマリ（mitl chimalli）は、ナウァトル語で戦いを意味するメタファとして知られている。武器として投矢器アトラトル（atlatl）や旗幟も描かれており、戦士が貴族階級に属することを示している。投矢器、楯と矢はメシーカの最高位神格テスカトリポカの持ち物とされていることから（Durán 1967: I,47）、征服者側戦士の衣装はテスカトリポカを体現するものと解釈できる。それは、戦士の左足がテスカトリポカの特徴である「煙の立つ義足」となっていることからも裏付けられる。

征服者側の戦士は、ケツァル鳥の羽毛製（quetzalpazactli）の頭飾り、胸当て、木綿製下帯マシュトル（máxtlatl）と革製腰巻エウァトル（ehuatl）を着用している（図5A）。蝶の形をした胸当ては、トルーカ近郊発見の壺のテスカトリポカ（図5B）の胸

当てと同じ形状で、イダルゴ州トゥーラ（Tula）遺跡のアトランテ像（図5C）にも描かれている。ティソックの石の征服者側戦士の五角形状の革製腰巻は、アトランテ像のものと同じ形状である。類似した衣装は1944年に大聖堂通路下で発見されたアトランテ像に似たメシーカ戦士の衣装類(図5D)にも見られる。征服者側の衣装類は、メシーカが支配権を正当化する際の根拠のひとつとされてきたトルテカ性（toltecayotl）[24]と関連するものと思われる。

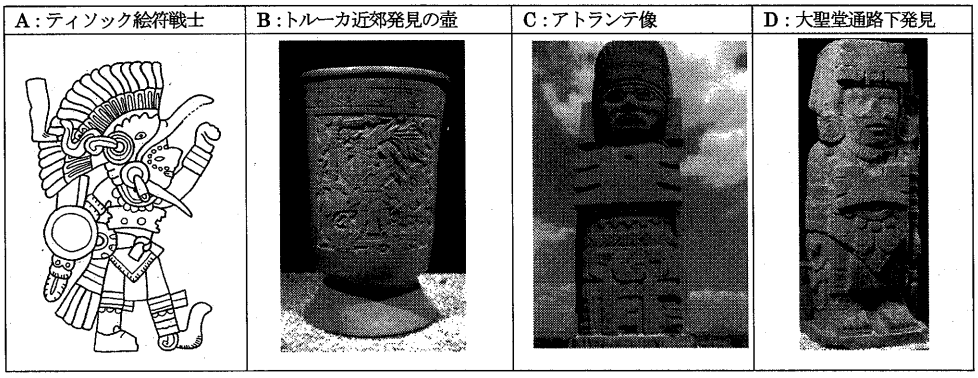


図5：征服側戦士のトルテカ性

旧大司教館の石の征服者側戦士の衣装類や武器類はほぼ同だが、ティソックの石の15名の征服者側の戦士の衣装類や武器類には微妙な違いがある。ティソックの人名絵符があるコラム12の戦士は（図5A)、他と異なった衣装や武器類をもっている。頭部には嘴を大きく開けたハチドリ型頭飾り、右手に幟付きの楯と投矢器を持っている。この頭飾りは、「南のハチドリ（huichiltli)」を意味するメシーカの部族・軍神のウィチロポチトリを識別するものである。コラム12の戦士の頭飾りと脚部の図像は、「聖戦の神殿」の正面上部の左側の「ウィチロポチトリ＝テスカトリポカ」(Umberger 1984）と同じものである。すなわち、ティソックの石のコラム12の戦士はメシーカの部族・軍神ウィチロポチトリ、他の14戦士はテスカトリポカとして表現されていると解釈できる。

2. 敗者側の戦士

征服者側の戦士には一定のまとまりがあるが、敗者側の戦士の武器類や衣装類には

かなりの変異があり、二つの石の図像の描かれ方の間でも少なからぬ差異がある。

(1) 敗者側戦士の武器類

敗者側戦士が左手に持っている武器類は、旧大司教館の石では3種類、ティソックの石では4種類となっている。旧大司教館の石では、投矢（tlacochtli）が6名（コラム1、3、4、7、9、10)、槍（tepoztopilli）が3名（コラム5、8、11)、弓（tlahuitolli）と矢が2名（コラム2、6）となっている。一方、ティソックの石では、投矢が10名（コラム4、7、8、9、10、11、12、13、14、15)、弓と矢が2名（コラム2、6)、槍が1名（コラム5)、後帯機で横糸を打ち込む木製の刀杼（tzotzopaztle）が2名（コラム1、3）となっている。

ティソックの石にだけある4つのコラム（12～15）の敗者側戦士は、全員が投矢の束を手にしている。しかし、二つの石彫モニュメントで共通する11のコラムで、敗者側戦士に共通する武器類が描かれている6つのコラム（2、4、5、6、7、9）で、残る5つのコラム（1、3、8、10、11）では、異なった武器が描かれている。ティソックの石に登場する刀杼は、旧大司教館の石の敗者側戦士の左手には描かれていない。

一方、敗者側戦士の右手の武器類に関しては、二つの石で大きな違いがみられる。旧大司教館の石の場合、敗者側戦士の右手の持ち物は、投矢器6名（コラム2、3、4、7、9、10)、投矢の束3名（コラム6、8、11)、刀杼1名（コラム1)、何ももたないもの1名（コラム5）となっている。一方、ティソックの石の場合、コラム12の敗者側戦士以外は全員が投矢器を右手に握っている。コラム12の敗者側戦士の右手にあるのは、テスカトリポカの持つトラチアロニ（tlachialoni）という鏡付き団扇と思われる（図6A、B)。

一方、旧大司教館の石のコラム5の場合（図6C、D)、戦士の右手は征服者側戦士に抵抗するかのように斜め上方に向かっている。これが、両者の足元に敗者側の帰属絵符があるために、武器類を描くスペースがないという構図上の問題なのか、コラム5が他のコラムと異なる特別の意味を持つためなのかは検討に値する。

武器類の描き分けは、帰属集団の差異を反映すると理解することもできる。一般的に、弓と矢は非トルテカ系民族集団チチメカ（chichimeca）を表すものとして描かれることが多い。弓と矢を手にするコラム2と6の帰属絵符はテナユーカとアコルウァカン

と解釈され、いずれもチチメカ系に属する人々によって築かれた町とされる。

(2) 敗者側戦士の衣装類

旧大司教館の石の9つのコラム、ティソックの石の13のコラムに描かれた敗者側の男性戦士は下帯を着用している。ティソックの石のコラム5の男性戦士だけが、半袖状の木綿製上衣（ichcahuipilli）と男性用下帯を着用し、武器も槍を携え、他の戦士とは異なった形で描かれている。旧大司教館の石では、コラム5の敗者側戦士だけが、右手に何も武器を持たない形で描かれ、特異な存在であることは前述した通りである。

二つのコラム（1、3）の女性戦士は、ティソックの石では不鮮明だが、旧大司教館の石では乳房をむき出した姿で描かれ、女性用巻きスカート（cueitl）を着用し、その腰の後部には頭蓋骨が描かれている（図6E、F)。二つの石では、巻きスカートや腰の後部の頭蓋骨などの衣装類はよく似ているが、後頭部の頭飾は異なっている。コラム1の頭飾は鷲の羽を束ねたクアウピローリ（cuauhpilolli)、コラム3の頭飾は方形の部分のモチーフは判然としないが、『ボルジア絵文書』に描かれた女神シウァテテオ（Cihuateteo）の頭飾と似たものである。女性戦士が手にしている武器類は男性戦士のものとは異なっている。旧大司教館の石のコラム1と3の女性戦士の左手は投矢を持っているが、右手は刀杼（コラム1）や投矢器（コラム3）を持っている。一方、ティソックの石の女性戦士は、右手に投矢器、左手に刀杼を持っている。

先スペイン期のメキシコ中央高原においては、女性戦士が実際の戦闘行動に直接的に携わっていたことを確認できる史料はない。しかし、石彫モニュメントなどにおいては、女性神格の衣装類を着用している戦士像がいくつか確認されている。先に紹介したメキシコ市の大聖堂通路下から発見された戦士像5体のうちの1体は女性戦士と

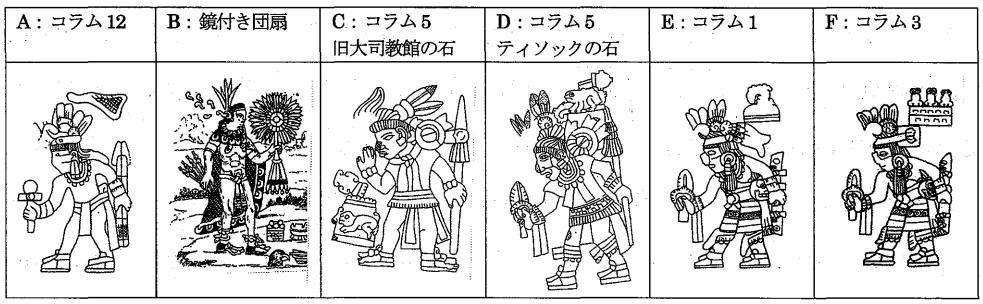


図6：敗者側戦士

表２　敗者側の戦士の神格の武器・衣装類の特性

	Ex-Ar 右	Ex-Ar 左	Tizoc 右	Tizoc 左	後頭	顔	胸部	耳飾	Wicke の神格同定
1	刀杼	投矢	投矢器	刀杼	CP		C、乳房	丸房	Cihuacoatl
2	投矢器	弓矢	投矢器	弓矢	丸房		C		Amímitl
3	投矢器	投矢	投矢器	刀杼			C、乳房	丸房	Chantico（Quilaztli）
4	投矢器	投矢	投矢器	投矢	CC	顎鬚	C		Mictlantecuhtli
5	—	槍	投矢器	槍	AN		房付 C, 木綿胴衣		Yaotzin
6	投矢	弓矢	投矢器	弓矢	CP	仮面	C	鹿足	Mixcoatl
7	投矢器	投矢	投矢器	投矢	蝶形	顎鬚	C		Otontecuhtli
8	投矢	槍	投矢器	投矢	丸帽	星状	C、		Paynal
9	投矢器	投矢	投矢器	投矢		星状	鈴なし C	方形	Huehuecóyotl
10	投矢器	投矢	投矢器	投矢	CC	顔斜	心臓	石刀	Iztli
11	投矢	槍	投矢器	投矢		顔帯	C	方形	Tezcatlipoca Negro
12			T	投矢		顔帯	C		Tezcatlipoca/Coltzin
13			投矢器	投矢	TL	笑顔	C	方形	Patecal
14			投矢器	投矢	CP	仮面	C		Tlahuizcalpantecuhtli
15			投矢器	投矢	CP		C		Mixcoatl

T：Tlachialoni（鏡付団扇）、AN：Anáhuatl（円盤羽つき）、AZ：Aztaxelli（鷺羽の房）
C：Cózcatl（鈴付き首飾）、CC：Cuexcochtechimalli（うなじ盾）、CP：Cuauhpilolli（鷲羽丸房）

なっている。この女性戦士像は、左手に刀杼を持ち、蛇が格子状に絡み合った巻きスカートを着用している。この女性戦士がコアトリクエ（蛇のスカート）を体現している可能性が極めて高い[25]。

(3) 敗者側戦士が表す民族集団の神格

二つの石彫モニュメントのコラム１と３の戦士が女性姿であることから、敗者側戦士像が征服された町の支配層や戦士そのものを具体的に表現したものでないことは明らかである。描かれている敗者側戦士像は、征服された町や地域で崇拝されていた神格を象徴的に表現したものと解釈すべきである（Wicke 1973; Umberger 2008）。この解釈の方が、ティソックの石で征服者側戦士がウィチロポチトリ１名と 14 名のテスカトリポカというメシーカの代表的神格で描かれていることと整合性がとれる。

従来の研究者の解釈では、女性戦士が描かれたコラム１の帰属絵符はコルウァカン、コラム３はショチミルコという点でほぼ合意がみられている。これに注目して、Wicke は敗者側戦士のイメージは、征服された町の神格を示すもという興味深い説を提出している（Wicke 1976: 217-221）。『絵によるメシーカ族の歴史』によると、クルウァカンではトウモロコシ神のシンテオトル（Cinteotl）、または地下世界の女神シウァコアトル（Cihuacoatl）、ショチミルコではキラストリ（Quilaztli）が崇拝されていた（Tena 2002: 46-47,61-62）とされている[26]。ショチミルコのシウァコアトルは家の女神チャン

ティコ（Chantico）とするSelerの解釈（Seler 1960: II,501）に基づき、Wickeはコラム1の神格をシウァコアトル、コラム3の神格をチャンティコと推定している。しかし、この推定では、『初稿記録』における神格の持ち物との食い違いが明白となる。『初稿記録』においては、チャンティコの持ち物は黒曜石埋め込みの羽毛付きの棍棒とされ(Sahagún 1993; Baird 1993)、刀杼という二つの石の図像とは異なっている。それ以外にも、後頭部の房飾や楯に描かれたモチーフも異なっている。

Wickeは他の13名の敗者側男性戦士の神格に関しても、表2に示した試案を提起している。しかし、彼の推論は各町で崇拝されていた神格に関する歴史資料と必ずしも一致していない。Wickeの同定によると、コラム2のテナユーカの神格はアミミトル(Amímitl)、コラム4のチャルコの神格はミクトランテクートリ(Mictlantecuhtli)となっている。しかし、『絵によるメシーカ族の歴史』では、アミミトルはクィトラウァック(Cuitlahuac）の主要神格、チャルコの神格はテスカトリポカ・ナパテクートリ(Nappatecuhtli）となっている。一方、ヤオツィン（Yaotzin）と同定されるコラム5のアスカポツァルコの神格は、『絵によるメシーカ族の歴史』ではオコテクートリ(Ocotecuhtli）と推定されている。また、『ドゥラン年代記』に基づき、Umbergerはコラム12のマトラツィンコの神格はコルツィン（Coltzin）であると推定している。現時点では、敗者側戦士が体現する神格を具体的に同定する作業は控えたい。

Ⅲ　戦闘シーンにおける敗者側戦士の帰属絵符

これまで、戦闘シーンの敗者側戦士に付された15の帰属絵符（図7）は、メシーカによって征服された町を示すというものと理解されてきた。20世紀前半までの研究者の多くは、ティソックの石の15の絵符はティソック統治期に征服された町を示すと解釈してきた。ティソック統治期に征服された町のリストが記載された年代記の地名から、15の帰属絵符の候補を選ぶ形で同定する作業が試みられてきた。

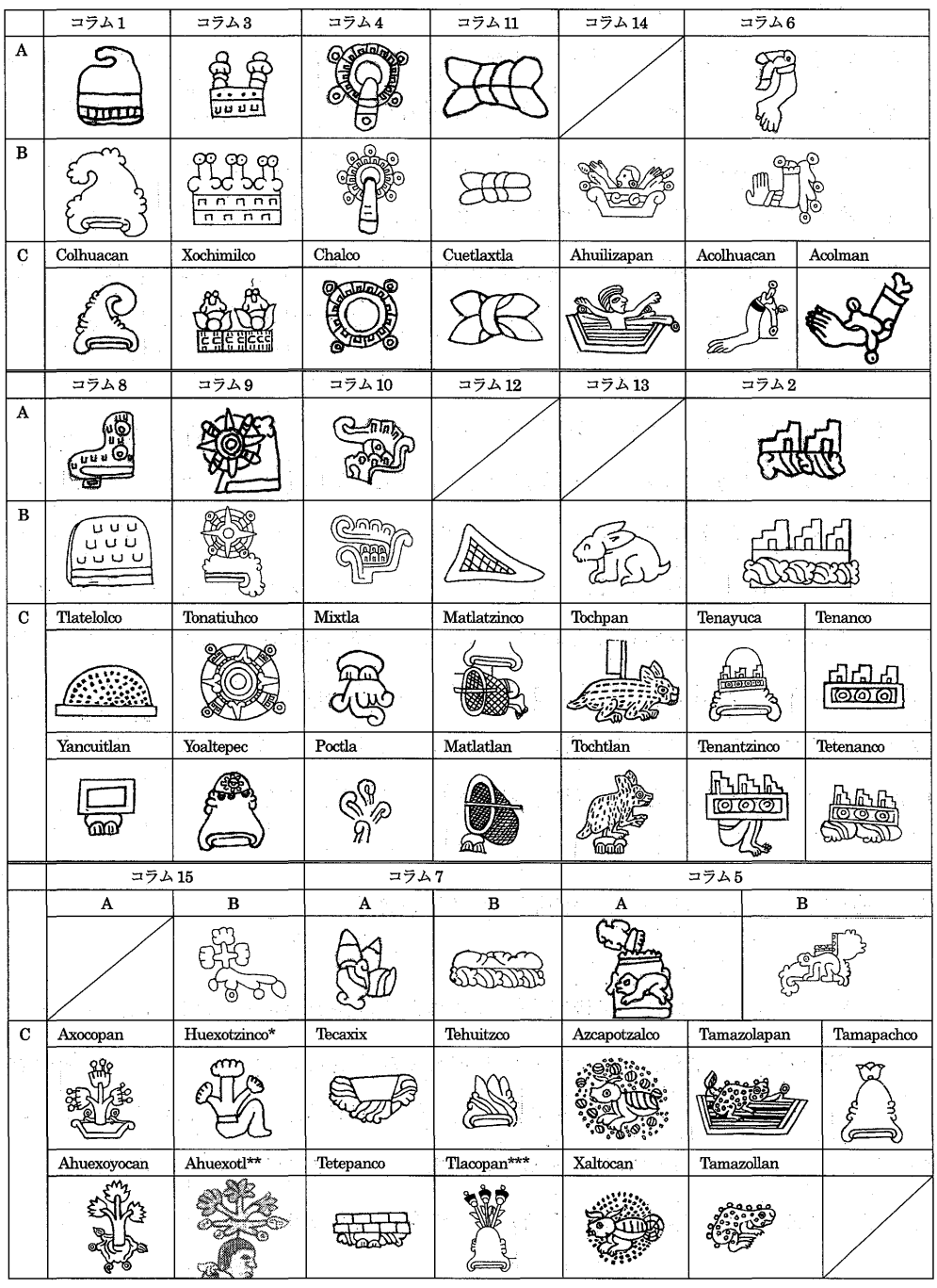


図7：二つの石の帰属絵符（図像の出典　A：旧司教館の石、B：ティソックの石、C：CMI,CMII）
*：Códice Boturini、　**：CRT、　***：Tlacotepec という CMI の読みは誤りの可能性大

1. 帰属絵符の解読の問題点

(1) ティソック期に征服された町と民族集団の絵符という解釈

表記に若干の違いはあるが、CMI、『クアウティトラン年代記』、『トラテロルコ年代記』などはティソック統治期の征服された町の数を 14 としている（表 3）。Orozco y Berra (1877) や Saville (1929) らは、この 14 の地名からティソックの石に刻まれた 15 の帰属絵符の候補を探し出そうとし、絵符を誤読することになった。

表３　ティソック統治期に征服された町

CMI	クアウティトラン年代記	トラテロルコ年代記	メシーカの歴史	Orozco y Berra
Tonalimoquezayan	Tonalimoquetzayan	Occetepec	Tonalimoquetzayan	Tonalimoquetzallan
Toxico	Toxico	Toxico	Toxico	Tozxiuco
Ehecatepec	Ecatepec	Ecatepec	Ecatépec	Ehecatepec
Zilan	Cillan	Tzillan	Cillan	
Tecaxic	Texcaxic	Tequaqucozcac		Tecaxic
Tuluca	Matlatzinco	Matlatzinco	Matlatzinco	Matlatzinco-Toluca
Yancuitlan	Yancuitlan	Tilmatlan	Yancuitlan	Yancuitlan
Tlapan	Otlapan	Tlatlauquiycixic	Tlappan	
Atezcahuacan	Atezacahuacan	Atezcauacan	Atezcahuacan	
Mazatlan	Mazatepec	Mazahuacan	Mazahuacan	
Xochiyetla	Xochiyetlan	Icxochitlan	Xochiyetla	
Tamapachco	Tamapachco	Matlapachco	Tamapachco	Tamapachco
Ecatl iquapechco	Ecatlyquappanco	Acatlapechco	Cohuatlicuauhpechco	
Miquetlan	Micquetlan	Occentepetl	Micquetlan	

代表的な例は、多くの研究者がトラテロルコと同定したコラム 8 の絵符をオアハカ州ミシュテカ地方のヤンクィトラン（Yancuitlan）と同定したことである。CMI のヤンクィトランの地名絵符は、二重線の方形（yancuic ＝新しいもの）と歯（tlantli）の絵符で構成され、ティソックの石の絵符の構成とは異なっている[27]。Orozco y Berra は、太陽や神を示す絵符と山（tepetl）の絵符で構成されるコラム 9 の絵符を CMI のトナリモケサリャン（Tonalimoquezallan）と同定している。しかし、CMI の地名絵符は、「立ち上がる（moquetzqui）」を指示する下肢と太陽の熱（tonalli）を示す 4 つの円形で構成され、ティソックの石の絵符と異なる。また、コラム 10 の絵符は、風神エエカトル（Ehecatl）の仮面と解釈され、ティソック統治期の征服リストにあるエエカテペック（Ehecatepec）と同定していた（Orozco y Berra 1877）。

ティソック統治期に征服された町のリストから探し出す方法では、ティソックの石の帰属絵符をうまく解読できない。実際、ティソックの石の帰属絵符の大半は、ティソッ

ク統治期以前に征服されたものである。解釈が確定しているコラムに限っても、クルウァカン（コラム1)、テナユーカ（コラム2)、ショチミルコ（コラム3)、チャルコ（コラム4)、アコルウァカン（コラム6)、ミシュトラン（コラム9)、クエトラシュトラン(コラム11)がある。最初の5つは第4代領主イツコアトル統治期までの征服リスト、残りの2つは第6代領主アシャヤカトルの統治期のリストに掲げられている。旧司教館の石との比較から、追加された4つのコラムは、ティソック統治期に征服された町と考えるべきであろう。

15の帰属絵符が、ティソックやそれ以前の領主に征服された町であることは明白である。しかし、Umberger（1998:78-81）は、絵符は征服された町の地名絵符（toponimic glyphs）ではなく、民族集団を示す絵符と解釈すべきであると指摘する。しかし、Umbergerが民族集団絵符としているものの多くは、民族集団が本拠とする特定の中心集落の名称に因んでいることも事実である。彼が提案した民族集団の中で、具体的な集落名が民族集団名称となっていないのは、コラム7のテパネカパン（Tepanecapan）とコラム12のマトラツィンコ（Matlatzinco）の2つだけである。しかし、前者の絵符をテパネカパンとする同定は、Umberger自身も確たる証拠に欠けているとしている。ティソックの石に彫られた絵符は民族集団を示す絵符と断定するよりは、民族集団が居住する地域（provincia）の名称を指示すると解釈するほうが妥当である。

(2) 帰属絵符同定の問題点

15の帰属絵符を同定・解読するには、いくつも障害がある。絵符自体が何であるかを判別できないものがあり、その絵符が、地名に含まれる音、それとも意味を指示するのかを弁別する基準も明確でないという問題がある。それゆえ、研究者の意見の合意がある地名解釈（表4）に関しても再検討を行うことが不可欠となる。近年では、語意表記（semasiografía）と音声表記（glotografía）[28]という基準（Wright 2009)、あるいは語・音節表記体系（logosyllabic writing systems）[29]という視点から、地名絵符を解読しようとする研究が試みられている（VanEssendelft 2011)。しかし、この種の研究においても、描かれた絵符の同定が最大の障害である。絵符の同定なしで絵符が伝えようとする音や意味を確定することはできない。

表 4：既往研究における 15 の帰属絵符の同定

	Orozco y Berra	Seler	Peñafiel	Saville	Clark	Dibble	Nicholson
1	Coatepec	Colhuacan	Colhuacan	Colhuacan	Colhuacan	Colhuacan	Colhuacan
2	Tenanco	Tenanco Tetenanco	Tenanco Tetenanco	Tenanco Tetenanco	Tetenanco	Tetenanco	Tenayocan
3	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco
4	Tozxiuhco	Chalco	Chalco	Chalco	Chalco	Chalco	Chalco
5	Tamazolapan	Tamazolapan	Tamapachco	Tamapachco	Azcaputzalco	Tamazollan	?
6	Acolman	Acolhuacan	Acolman	Acolman	Acolhuacan	Acolhuacan	Acolman
7	Tecaxic	Tepanohuayan	Tecaxic	Tecaxic Tetelman	?	Tepanoayan	?
8	Yancuitlan	Tlatelolco	Tlatelolco	Tlatelolco	Tlatelolco	Tlatelolco	Tlatelolco
9	Tonalimoquetzallan	Teotitlan	Tonatiuhco Tonaltepec	Tontiuhco Tonaltepec	Yoaltepec	Teotitlan	?
10	Ehecatepec	Poctlan	Tecamachalco	Tecamachalco Echecatepec	Eecatepec	Poctlan	?
11	Cuetlaxtla	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtla	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtlan
12	Matlatzinca	Matlatzinco	Matlatzinco	Matlatzinco	Matlatlan	Matlatzinco	Matlatzinco
13	Tochtla	Tochpan	Tochtla	Tochtla	Tochpan	Tochpan	Tochpan
14	Ahuilizapan	Ahuilizapan	Ahuilizapan	Ahuilizapan	Ahuilizapan	Ahuilizapan	Ahuilizapan
15	Axocopan	Huexotla	Axocopan	Axocopan	Axocopan	Huexotla	?

	Wicke	Pérez-Castro	Graulich	Umberger	Solís	Wright Carr	VanEssendelft
1	Colhuacan	Colhuacan	Colhuacan	Culhuacan	Culhuacan	Colhuacan	Colhuacan
2	Tetenanco	Tenayocan	Tenayocan	Tenayuca	Tenayuca	Tenayocan	Tetenanco
3	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilco	Xochimilico
4	Chalco	Chalco	Chalco	Chalco	Chalco	Chalco	Chalco
5	Xaltocan	Tamazolapan	Azcapotzalco	Azcapotzalco	Tamazulapan Xaltocan	Azcapotzalco Xaltocan	Tamazolapan
6	Acolhuacan	Acolhuacan	Acolhuacan	Acolhuacan	Acolman Acolhuacan	Acolhuacan Acolman	Acolhua
7	Tecaxic	Tecaxic	Teotenanco	Tepanecapan	Tepanohuayan Tecaxic	Tetepanco, Tenanco Tetenanco, Tecaxic	?
8	Tlatelolco	Tlatelolco	Tlatelolco	Tlatelolco	Yanhuitlan (Tlatelolco)	Tlatelolco Tonatiuhco	Tlatelolco
9	Tonatiuhco	Tonatiuhco	Tonatiuhco	?	Tonatiuhco	Teotenanco	Tona?
10	Mixtlan	Quiahuistlan/ Mixtla	Mixtlan	?	Mixtlan	Mixtlan	Mixtlan
11	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtlan	Cuextlaxtlan	Cuetlaxtlan	Cuetlaxtlan
12	Matlatlan		Matlatzinco	Matlatzinco	Matlatzinco	Matlatzinco	Matlatzinco
13	Tochpan		Tochpan	Tochpan	Tochpan	Tochtla, Tochtlan Tochpan	Tochpan
14	Ahuilizapan		Ahuilizapan	Ahuilizapan	Ahuitzilapan	Ahuilizapan	Ahuillizapan
15	Axocopan		Axocopan	?	Huexotzingo	Ahuexoyocan	Ahuehuepan

出典：Clark (1938), Dibble (1971), Graulich (1992), Nicholson (1973), Orozco y Berra (1877)
Pérez Castro et al. (1989), Peñafiel (1910/1979), Saville (1929), Seler (1902/1960: II,767-904)
Solís et al. (2004), Umberger (2008), VanEssendelft (2011), Wicke (1976), Wright (2009)

①　絵符の判別の問題

同定作業に関しては、二つの石に描かれている帰属絵符の相互比較、そして植民地期のメシーカ系地名絵符との照合などが不可欠である。しかし、二つの石で、絵符の表現に顕著な差が見られるものもある。その代表例はコラム７の帰属絵符である。

コラム７の場合、旧司教館の石では３つの絵符素で構成され、下部の絵符素が石（tetl）であることは自明である。しかし、上部の左側は尖った石刀のようにも見えるが、はっきりとは判断できない[30]。一方、ティソックの石では上下に重なる二つの絵符素で構成されている。下部の絵符素が石であることは共通しているが、上部の絵符素が何を示すかは判断しにくい。波立つ水面のようにも見えるが、旧司教館の石には水の要素など見当たらない。研究者の多くは、この絵符をテパノウァヤン（Tepanohuayan）、あるいはテカヒック（Tecaxic）と同定してきた。

Seler が提示したテパノウァヤンとする同定は、チコモストックという始原の洞窟を出発した７部族のひとつテパネカ（los tepanecas）に関する『ラミレス絵文書（Códice Ramírez）』の説明に基づくものである。そこでは、「テパネカは、橋、あるいは石の路地の人々という意味である。これは石の橋を意味するテパノウァヤンに由来する。これは tetl（石）と panohua（川を渡る）と場所を指す接尾辞 yan という３つの語で構成される」という記述がある（Alvarado Tezozómoc 1975: 19）。植民地期の絵文書では民族集団テパネカは石の絵符で示され、テパノウァヤンを示す地名絵符は確認されていないが、Seler はティソックの石のコラム７の絵符が「石の橋」という記述に適合していると判断したのである。一方、CMI のテカヒックの地名絵符は、３つの石（tetl）で構成された鉢状のもので、鉢状の深い鉢（caxitli）の音を提示することが可能になる。しかし、このテカヒ（te-caxi）という音は、旧司教館の石やティソックの石にある帰属絵符から導き出すことはできない。コラム７の絵符の同定に関しては、次節（3）で別の側面から検討する。

上下に２列の波状の絵符が重ねられ、その中に３つの方形の突起が描かれているコラム 10 の絵符の同定に関しても、多くの解釈が提出されてきた。風の神エエカトルの顔と解釈されたこともあるが、現在では、雲（mixtl）と同定した Wicke（1974）の見解に基づき、研究者の多くはミシュトラン（Mixtlan= 雲の多い場所）と同定している。

CMI や CM II では、ミシュトランは一重の雲（mixtli）と歯の絵符の組み合わせで示されるが、二つの石ではトランの音を示す場所接尾辞の絵符は欠落している。

絵符の同定に関する意見が分岐している代表例はコラム５である。二つの石の帰属絵符は４つ足の小動物と横に倒れた山で構成されている。小動物の同定をめぐって見解は分岐し、ガマ（tamazollin）、モグラに似た齧歯類の小動物（toçan）、蟻（azcatl）に見立てられてきた[31]。現時点ではガマ説が多数派で、帰属絵符の候補としては、タマパチュコ（Tamapachco）、タマソラン（Tamazollan）、タマソラパン（Tamazolapan）が提示されている。このうち、Peñafiel などのタマパチュコ説は、CMI のタマパチュコの絵符と一致しないことから現在では支持されていない。一方、タマソランとタマソラパンの両方ともメシーカのコアイシュトラウァカ貢納区の徴税官駐留地であるが、前者に該当する場所が確認できないため、タマソラパン説が多数派である。しかし、この説の致命的欠陥は、横に倒れている山の絵符を一切考慮していないことである[32]。

小動物をモグラに似た齧歯類の小動物[31]とする説では、コラム５の絵符はシャルトカン（Xaltocan）ということになる。CMI では、シャルトカンは第２代領主ウィチリウィトル（Huitzilihuitl、1391 ～ 1417 年）統治期の征服リストに入っている。CMI のシャルトカンの絵符は、砂（xalli）とモグラ（toçan）の二つの絵符で構成されている。二つの石の横に倒れた山と小動物の絵符の組み合わせは、モグラによって地盤が壊された集落を表現すると解釈できるが、砂の要素の欠落の説明が必要となる。

小動物を蟻とする説では、コラム５の絵符はアスカポツァルコ（Azcapotzalco）ということになる。CMI では、アスカポツァルコは第４代領主イツコアトル統治期の征服リストに掲げられている。従来、アスカポツァルコは「蟻の巣（azcaputzali）」という意味とされてきた。CMI のアスカポツァルコの絵符は 10 個近くの小石と砂のなかに潜む蟻で表現されている。小動物の４本足に拘泥するなら、蟻は候補から外れるが、CMI のアスカポツァルコの蟻の絵符は前足２本を強調した姿で描かれており、細部表現に拘泥する必要はないかもしれない。

横に倒れた山の絵符に関しては、意味か音を指示するかで、読み方は変わってくる。前者の場合だと、蟻が多く住むことで崩れた山＝集落を表現していると解釈できる。

一方、「崩壊した山」に関連するナワトル語として、「壊れたもの（cosa quebrada)」を意味するpoztectliがあることは興味深い[33]。これによって、pozという音が指示されていると解釈することも可能である。

コラム15の帰属絵符に関しても、絵符を何と同定するかにより、複数の候補が挙がってくる。描かれた木の種類を同定する決め手はなく、その図像が一般名称としての木（quahuitl）なのか、それともahuehuetl（アウェウェ松）、ahuacatl（アボカド）、huaxin（アカシア）、huexotl（柳）、tzapotli（サポーテ）、xocoyotl（ショコーテ）、といった個別の樹種と見立てるかで、絵符の読み方は大きく変わる。既往の研究の多くはこの木を柳と同定しているが、その判断材料は木の下の水（atl）の絵符である。しかし、CMIやCMIIの木の絵符の根元には、ほとんど水の絵符が描かれていることからも、水の絵符が音を指示するとみなす必然性はない。

② 場所接尾辞の問題

絵符が必ずしも地名絵符の音を示さないという点は、場所接尾辞に相当する絵符の有無とも関連し、二つの石の絵符解読を大きく左右する問題である。

コラム12の帰属絵符には、三角形状の網（matlatl）が描かれている。一方、CMIで網の絵符がある地名絵符として、アシャヤカトルとティソックの統治期に征服されたトルーカ・マトラツィンカ（Toluca-Matlatzinca)、アシャヤカトルの統治期に征服されたマトラトラン（Matlatlan）の二つがある。ただし前者は、山の絵符と俯いた顔で示されるトルーカの地名絵符と連結して描かれている。CMIでは、マトラツィンカは網と下半身（tzintli）の組み合わせ、マトラトランは網と歯（tlantli）の組み合わせで示される（図7コラム12)。網の絵符だけで両者を判別できないため、CMIでは、tzinco（=tzintli）やtlan（=tlantli ）という場所接尾辞の音に対応する絵符が付されている。場所接尾辞に対応する絵符の有無は、細かい線を描くことが容易な紙と困難な石という媒体の差に規定されるとも考えられる。

それとは逆に、帰属絵符に描かれている絵符が音を示していないケースもティソックの石では観察できる。コラム9は、太陽（tonatiuh）の絵符と集落を示す山の絵符で構成され、多くの研究者はトナティウコ（Tonatiuhco）と同定してきた。しかし、この帰属絵符には山の絵符がもつテペックの音は取り込まれていない（図7コラム9)。

CMIで山の絵符のある地名絵符には、テペックではなく、トラン（tlan）、ラン（lan）、パン（pan）、コ（co）といった場所接尾辞に対応する音を持つものも少なくない[34]。

地名接尾辞の欠落が他の帰属絵符にもあると仮定すると、要塞（tenamitl）の絵符で示されるコラム2は、テナンコ（Tenanco）ともテナンツィンコ（Tenantzinco）とも解読できる。実際、CMIではこの二つの地名絵符を確認できるが、従来の研究では、コラム2の帰属絵符はテナユーカ（Tenayuca）とされてきた。しかし、CMIのテナユーカは、山の絵符と要塞の絵符で構成され、山の絵符に対応する音は地名に表れていない（図7コラム2）。既往の研究の大多数がテナユーカと同定しているのは、歴史的な文脈を考慮したためである。

ツィンコ、テペック、トランなどの場所接尾辞に相当する絵符を付加したうえで、帰属絵符の候補地名を想定すべきことは言うまでもない。1480年前後の石彫モニュメントに彫られた絵符と植民地初期の1540年代に作成された絵文書における絵符を直接比較することにはいくつもの障害がある。先に指摘した場所接尾辞の表示という技術的問題だけでなく、1480年代とスペイン人が到来した1520年前後のメシーカの内部の政治的勢力関係の変化も考慮すべきである。次項で説明する歴史的文脈を十分に考慮した上で、上記の原則を適用しないと、不必要な地名候補が乱立するだけになる。

(3) 歴史的文脈における帰属絵符の同定

帰属絵符の同定に当たっては、この二つの石彫モニュメントが製作された歴史的文脈を無視することはできない。二つの石彫モニュメントは、メシーカの歴代領主の征服事業を石造物という3次元空間に顕彰すべき出来事として彫り込もうとしたものである。二つの石に刻まれた帰属絵符は、はたしてどのような基準で選ばれたのか？大神殿地区への二つの石彫モニュメント設置の時期を確認し、竣工完成に伴う一連の政治的パフォーマンスの中で、石彫モニュメントはどのように機能していたのかを理解する必要がある。記念モニュメントに彫り込まれるからには、さまざまな年代記において何らかの形で言及される重要な意味をもつ町でなければならない。

既往の研究では、旧大司教館の石はアシャヤカトル在任中（1469～1481年）、ティソック石はティソック在任中（1481～1486年）に制作されたとされる。コラム1とコラム2の帰属絵符は、CMI冒頭のテノチティトラン創設シーンの下部に描かれている二

つの征服された町に対応している。コラム3、4は、第1代から3代領主の時代にかけて征服された町である。第6代領主までに征服された町が11ということなら、1代の領主の統治期間で、ほぼ2つの町が選ばれている計算になる。こうしたことを考慮したうえで、帰属絵符の同定候補が複数あるものを振るい落とす作業が要請される。

コラム6は第4代領主在位中に征服されたアコルワカン、コラム8は第6代領主在位中に征服されたトラテロルコであることは、研究者の間で合意が成立している。コラム5とコラム7は、第4代から第7代領主の在任中に征服された町ということになる。コラム5の絵符の小動物の解釈をめぐって意見が分岐していることは前項で紹介したが、本試論ではこの絵符をアスカポツァルコと同定することにしたい。その理由は、テパネカ系専制君主が統治していたアスカポツァルコの征服こそが、メキシコ盆地でのメシーカの覇権を確立した第4代領主イツコアトルの最大の功績とされるからである。オアハカ州ミステカ高地のタマスラパンやタマスラの征服はCMIの征服リストに記載されず、「クロニカX」系年代記で言及もされていない。

コラム7の帰属絵符がテパノウァヤンを指示すると仮定するなら、以下のように考えることができる。順序からすれば、この町は第5代か第6代領主の在位中に征服されたことになる。テパノウァヤンという地名絵符は植民地期の絵文書資料にないため、場所の同定は難しい。しかし、『クアウティトラン年代記』には、いわゆるアステカ帝国に相当する三都市同盟（Triple Alianza）の首都として、「テノチティトラン・メシコ（Tenochtitlan Mexico）、テツココ・アコルワカン（Tetzcoco Acolhuacan）、トラコパン・テパノアヤン（Tlacopan Tepanoayan）」が列挙されている。また、テパネカの専制君主マシュトラ（Maxtla）がアスカポツァルコで王位に就く前には、テパノアヤン（テパノウァヤンと同一）を統治していたとされる。テパノウァヤンは、テパネカ系領主が支配していたトラコパンやアスカポツァルコの同義語として用いられていたのである（Carrasco 1996: 288-290）。実際、CMIのアシャヤカトル統治期の征服リストにトラコパン[35]が記載されている。つまり、テパノウァヤンはトラコパンを指すと解釈することもできる。

一方、『ドゥラン年代記』には、トラコパンの王はトラルウァクパン（Tlaluacpan）の王だったという記述がある（Durán 1967: II,122）。トラルウァクパンは「痩せた（huac）

土地（tlaltli）」という意味だが、ここで想起されるのが旧大司教館の石のコラム７の帰属絵符である。この絵符には下部の石の絵符から突き出す石刀のようなものが２本描かれ、横に土地のような絵符素がつけられている。この絵符が石ころだらけの肥沃でない土地を意味するなら、ティソックの石における絵符７の表現とも整合性が取れる。この絵符はトラコパンに相当するトラルウァクパンと同定できるのではないだろうか。

これまでの推論が正しいとすると、コラム１～８の帰属絵符はすべてメキシコ盆地域内に分布していることになる。一方、コラム９～15の帰属絵符はメキシコ盆地域外に分布する町を指している可能性が高くなる。事実、この７つのコラムのうち、多くの研究者の意見が一致しているコラム11のクエトラシュトラ、コラム13のアウィリサパン、コラム14のトチュパンは、いずれもメキシコ盆地東側に位置する現ベラクルス州の集落である。残るコラム9、10、12の帰属絵符に関しても、それぞれトナティウコ、ミシュトラン、マトラツィンコということで、大方の意見は一致しているが、コラム15の帰属絵符に関しては、年代記などの歴史資料との照合による裏付けが十分とはいえない。

1470年代末に作成された「太陽の石」には、勇敢なメシーカ戦士、海岸地方など遠隔地の征服の様子が彫られていたという記述に基づき、コラム９以降の帰属絵符が示す集落が海岸地方にあると仮定すれば、通説とは異なった解釈も提出できる。コラム12の帰属絵符をマトラトランと同定できるなら、11、12、13、14のコラムの帰属絵符はすべてベラクルス州に分布することになる。そうであれば、コラム15の帰属絵符もベラクルス州に位置する集落となる蓋然性が高くなる。

おわりに

この試論において、従来の研究では同定が定まっていなかったコラム５と７の帰属絵符に関して、ほぼ間違いないと思われる仮説を提示することができた。しかし、メキシコ盆地域の外部に分布していたと想定できるコラム８から15までの帰属絵符の中には、従来の定説といえども、十分な根拠に裏付けられたものがまだ残っている。

2010年から2011年にかけ、ティソック統治期の風の神エエカトル＝ケツアルコアトル神殿が発掘され、今年はモクテスマI世統治期の遺構から、シンボルが刻まれた火山岩性の石板23枚や生贄執行台と多数の頭蓋骨などが発見されている。旧大司教館の石やティソックの石に先行する旧いクアウシカーリやテマラカトルが今後発見されることで、新たな解釈を可能にする情報が得られるかもしれない。

また、石彫モニュメントに彫られた地名絵符を解読するに当たり、植民地期の絵文書にある絵文字の書記体系との単純な照合だけで解釈を決定することは慎むべきことを再確認しておきたい。二つの石彫モニュメントが、メシーカ歴代諸領主の征服事業の歴史的・政治的意味を表出する装置として、竣工式や生贄儀礼の場でどのように機能していたかについては、稿を改めて論じることにする。

献辞：去る2012年1月18日、Pedro Carrasco Pizana博士が逝去された（享年90歳）。メキシコ社会人類学高等調査研究所（CIESAS）に客員研究者として滞在していた際（1988～1989年）、博士はアステカ貢納制度に関する研究のスペイン語による出版を強力に推進してくださった。9月下旬にCIESASで開催された追悼記念シンポジウムに参加できなかったが、この試論を博士に献呈できれば幸いである。

注釈

1）従来、「ほぼ先スペイン期作成」の絵文書とされてきたボトゥリニ絵文書などの絵文字表現にヨーロッパから導入された様式があることが指摘されている（Escalante 2010: 61-64）

2）ティソックの石は、1560年代、初期大聖堂の東側の工事中に発見され、初期大聖堂の「許しの門（La Puerta del Perdón）」に洗礼式容器としておかれていた（Durán 1967: II,189）。

3）旧大司教館の石は、1525/26年頃に征服者ロドリゴ・ゴメスの館の一角に埋設されたことが知られている（López Austin y López Luján 2010）。

4）モクテスマI世の石という説は発掘担当研究者などの公式見解（Padilla et al. 1989）だが、Graulich（1992）などは第6代領主のアシャヤカトルの石であると主張する。

5）アステカ暦石の中央の神格は、太陽神トナティウ（Tonatiuh）とする説が通説だが、大地の神トラルテクートリ（Navarrete y Heyden 1974）、夜の神ヨウァルテクートリ（Yohualtecuhtli）とする説（Klein 1976）もある。多様な解釈の背景には、太陽が昼の太陽神（天上）、夜の土地の神（地下）、火の神という多義性を持っていることがある（Graulich 1997: 164-168）。

6）Solísは、この王冠がモクテスマI世を示すものと解釈している（Solís 1989）。一方、Graulichは、王位そのものと解釈すべきであると指摘している（Graulich 1992）。

7）クルウァカンのあるコラムを第1コラムとし、反時計回りに順番を付ける。

8）一般に、クアウシカーリは生贄の心臓や血の容器、テマラカトルは闘う捕虜を繋ぎ止める環形の石とされている（Durán 1969: II, 171-172, 188-189）。

9）トラカシペウァリストリの儀式に関しては、González y González（2011）を参照されたい。

10）トラウァウァニリストリ（tlauauaniliztli）儀式は、ローマ帝国の剣闘士の戦いになぞらえ、剣闘士の生贄（sacrificio gladiatorio）と呼ばれる（González Torres 1985: 223-228; Bueno 2009）。

11）ティソックの石では同心円状の環が3つあり、内側から1番目の環16個、2番目の環40個、3番目の環47個となっている。

12）ドゥランが作成した記録は、先スペイン期に関する『ドゥラン年代記』と先スペイン期の儀礼を記述した『ドゥラン儀礼記』の2部で構成される。

13）チマルパインの『第七報告書』は、1458年に設置のモニュメントはテマラカトルとしている（Chimalpahin 1998: II,88-91）。

14）トチュパン（Tochpan）はトゥスパン（Tuzpan）と同一で、ワステカ地方にある。

15）『メシカーナ年代記』によると、「ウィチロポチトリの館の正面にある神殿の上部」におかれた。「正面にある神殿」は、『初稿記録』の大神殿区域の建物を描いたフォリオの注記のモモストリ（momoztli）に対応すると考えられる。モモストリは「正面の祭壇」という意味である。

16）メシーカ社会においては、通常の征服戦争（ocoltic yaoyotl）と、生贄にする捕虜を確保のために行われる花戦争（xochiyaoyotl）があった（Bueno 2007: 158-175）。

17）ティソックの即位年は年代記ごとに異なり、『メンドサ絵文書』第I部は「3の兎」（1482年）としているが、アシャヤカトル死去の「2の家」（1481年）に即位したとされる。

18）テチカトルは腰の高さぐらいの台形状で、円盤状ではない。

19）「クロニカX」系年代記では、月の女神コヨルシャウキ、風神ツィツィミトル、コアトリクエと思われる「華美な羽毛のついた十字架状の2つの袖のある神格」の像が同時に完成している（Durán 1967:II,333; Alvarado Tezozómoc 1997: 261）。

20）1487年の大神殿落成式の人身犠牲の規模を4日間で数万人とする年代記の記述が、誤った前提や絵文書の誤読などに由来することに関しては、小林（2000）を参照されたい。

21）この記述が2006年に発見のトラルテクートリの石像の下にアウィツォトルに遺体があるという推測の根拠となっている。

22）トラカテクロカルコ（tlacateculocalco）は「トラカテコロトルの家」という意味である。人間（tlacatl）と梟（tecolotl）で構成されるトラカテコロトル（tlacatecolotl）は、植民地期には悪魔を指す言葉だった。

23）大半の研究者がトラテロルコと同定するコラム8の絵符について、Umberger（1993: 100）と Solís et al.（2004）は別の地名を推定している。詳細は後述する。

24）トルテカ性（toltecayotl）に関しては、León-Portilla（1980）を参照されたい。

25）1944年に大聖堂通路下発見のメシーカ戦士とトゥーラのトルテカ戦士の異同については、Navarrete y Crespo（1971）、メシーカのトルテカ様式採用に関しては、López Luján y López Austin（2009）を参照。

26）『初稿記録』では、キラストリはシウァコアトルの別名とされ（Sahagún 1993: fol.264r）、『ドゥラン儀礼記』では、ショチミルコの主要神格はシウァコアトルとされている（Durán1967: I,125）。

27）コラム8に関する同様の見解は、現代の研究者 Solís も示している。彼はコラム8の帰属絵符を旧大司教館の石ではトラテロルコ、ティソックの石ではヤンウィトランとしている（Solís et al. 2003）。また、Umberger は、旧大司教館の石ではミシュテカ地方ヨアルテペック

(Yoaltepec)、ティソックの石ではトラテロルコと推測している（Umberger1993:100)。前者の山の絵符の中に二つの目の絵符があることを指摘しているが、このコラムだけ異なった帰属絵符が描かれている理由は説明されていない。

28) 語意表記法（semasiografía）は記号が複数の言語で意味を持ちうるものであり、音声表記法（glotografía）は、語表記（logograma）と音表記（fonograma）に分類されるが、分類不能なケースもあるとされる。

29) 語・音節表記体系（logosyllabic writing systems)」は、音節記号（syllabic signs）と音声補足（phonetic complementation）で構成される。

30) 旧大司教館の絵符にある2本の尖った（huilztli）石（tetl）から、Tehuitzco と推定することも可能である。

31) López Austin は、『トルテカ・チチメカ史』folio.7v にある山の頂にまたがったガマに注目して、ガマのまたがる山の絵符がチョルーラを意味する可能性もあると指摘している（López Austin 2006:121-126)。

32) この小動物の尾に描かれている渦巻きから、砂の中に住む蜘蛛の仲間（araña de la arena）とする意見もある（López Austin 2006:108)。

33) López Austin はワステカ地方チコンテペック近郊のポステクトラン（Poztectlan）との関連で、poztectli を出しているが、横に倒れた山の絵符との関連については言及していない（López Austin 2006:126,131)。

34) 山の絵符が "co" という場所接尾辞となっている事例は、Nopopoalco、Chiconquiauhco の2例である。

35) CMI の絵符に付されている注記は Tlacotepec となっているが、『オスナ絵文書（Códice Osuna)』では同じ絵符に Tlacuban（=Tlacopan）という注記が付いている。

文献

小林　致広

1982　甦るアステカの大神殿、『世界旅行―民族の暮らし5「創る祀る」』藤井知昭編、日本交通公社、140-153頁

2000　敗者の歴史でないインディオ史は可能か、『立命館言語文化研究』12巻1号。

Alvarado Tezozómoc, Hernando

1975　*Crónica Mexicana. Códice Ramírez.* Editorial Porrúa.

Baird, Ellen T.

1993　*The Drawings of Sahagún's Primeros Memoriales. Structure and Style.* University of Oklahoma Press.

Batalla Rosado, Juan José

1995　Escritura de tradición mixteca-puebla. La escritura mexica o azteca. *Estudios de Historia Social y Económica de America*, No.12: 625-638.

Bueno Bravo, Isabel

2007　*La Guerra en el imperio azteca. Expansión, ideología y arte.* Editorial Complutense.

2009　El sacrificio gladiatorio y su vinculación con la guerra en la sociedad mexicana. *Gladius*, XXIX: 185-204.

Carrasco, Pedro

1996　*Estructura político-territorial del Imperio tenochca.Triple Alianza de Tenochtitlan,*

Tetzcoco y Tlacopan. FCE/El Colegio de México.

Castillo, Cristóbal del

1991 *Historia de la venida de los mexicanos y otros pueblos e Historia de la conquista.* INAH.

Clark, James Cooper

1937 *Codex Mendoza: The Mexican Manuscript Known as the "Collection of Mendoza" and Preserved in the Bodleian Library. Oxford.* 3vols. Waterlow and Sons.

Couvreur, Aurélie

2001 La description du Grand Temple de México par Bernardino de Sahagún (Codex de Florence, annexe de Livre II). *Journal de la société des américanistes* 88: 9-46.

Dibble, Charles

1971 Writing in Central Mexico. In *Handbook of Middle American Indians*, edited by Robert Wauchope, Gordon Ekholm and Ignacio Bernal, Vol.10, pp. 322-332. University of Texas Press.

Durán, Diego

1967 *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme.* 2 tomos. Editorial Porrúa.

Escalante Gonzalbo, Pablo

2010 *Los códices mesoamericanos antes y después de la conquista española.* FCE.

Garibay, Ángel María.

1973 *Teogonía e historia de los mexicanos.* Editorial Porrúa.

González y González, Carlos Javier

2011 *Xipe Tótec. Guerra y regeneración del maíz en la religión mexica.* FCE.

González Torres, Yolotl

1985 *El sacrificio humano entre los mexicas.* FCE.

Graulich, Michel

1992 On the so-called "Cuauhxicalli of Motecuhzoma Ilhuicamina" the Sánchez-Nava Monolith. *Mexicon*, vol. XIV, No.1: 5-10.

1997 Reflexiones sobre dos obras maestras del arte azteca: Piedra del Calendario y el Teocalli del guerra sagrada. En *De hombre y dioses.* Coordinado por Noguez, Xavier y Alfredo López Austin, pp. 155-207. El Colegio de Michoacán/El Colegio Mexiquense.

Klein, Cecilia

1976 The Identity of the Central Deity on the Aztec Calendar Stone. *The Art Bulletin* 58-1: 1-12.

León-Portila, Miguel

1980 *Toltecayotl. Aspectos de la cultura náhuatl.* FCE.

López Austin, Alfredo

1965 El templo mayor de México Tenochtitlan según los informantes indígenas. *Estudios de Cultura Náhuatl* 5: 65-102.

2006 Mitos e íconos de la ruptura del Eje Cósmico: Un glifo toponímico de las piedras de Tízoc y del Ex-Arzobispado. *Anales del Instituto de Investigaciones Estéticas*, No.89: 93-134.

López Austin, Alfredo y Leonardo López Luján

2009　*Monte Sagrado. Templo Mayor.* INAH/UNAM.

2010　La historia póstuma de la Piedra Tízoc. *Arqueología Mexicana,* No.102: 60-69.

López Luján, Leonardo y Alfredo López Austin

2009　Los mexicas en Tula y Tula en México-Tenochtitlan. *Estudios de Cultura Náhuatl* 40: 33-83.

Matos Moctezuma, Eduardo

1997　Tlaltecuhtli: Señor de la Tierra. *Estudios de Cultura Náhuatl* 27:15-40.

2010　The Tízoc Stone and the Archbishop's Stone. En *Mexica Monumental Sculpture.* Edited by Moctezuma, Matos y Leonardo López Luján, pp. 291-327. INAH.

Navarrete, Carlos y Ana María Crespo

1971　Un atlante mexica y algunas consideraciones sobre los relieves del Cerro de la Malinche, Hidalgo. *Estudios de Cultura Náhuatl* 9: 11-15.

Navarrete, Carlos y Doris Heyden

1974　La cara central de la piedra del Sol. Una hipótesis. *Estudios de Cultura Náhuatl* 11: 355-376.

Nicholson, H. B.

1973　Phoneticism in the Late Pre-Hispanic Central Mexican Writing System. In *Mesoamerican Writing Systems, a Conference at Dumbarton Oaks, October 30th and 31st, 1971.* Edited by Elizabeth P. Benson, pp. 1-46. Dumbarton Oaks.

Orozco y Berra, Manuel.

1877　El cuauhxicalli de Tizoc. *Anales del Museo Nacional de México* 1: 3-39.

Penafiel, Antonio

1979　Destrucción del Templo Mayor de México antiguo y los monumentos encontrados en la ciudad, en las excavaciones de 1897 y 1902. En *Trabajos arqueológicas en el centro de de la ciudad de México, Antologia.* Coordinado por Matos Moctezuma, Eduardo, pp. 95-138. INAH.

Pérez-Castro Lira, Guillermo, Pedro Francisco Sánchez Nava, María Estéfan, Judith Padilla y Yedra, Antonio Gudiña Garfias.

1989　El *cuauhxicalli* de Moctezuma I. *Arqueología* (Dirección de Monumentos Prehispánicos, INAH), No. 5, 1989, pp. 131-151.

Sahagún, Fray Bernardino de

1988　*Historia general de las cosas de Nueva España.* 2 tomos, Alianza Universidad.

1993　*Primeros Memoriales. Facsimile Edition.* University of Oklahoma Press.

1997　*Primeros Memoriales. Paleography of Nahuatl Text and English Edition.* University of Oklahoma Press.

Saville, M.

1929　*Tizoc: great lord of the Aztecs, 1481-1486.* Museum of the American Indian, Heye Foundation.

Seler, Eduard

1960　*Gesammelte Abhandlungen zur Amerikanischen Sprach-und Altertums-kunde.* Band. II. Akademischen Druck-u. Verlagsanstalt. Graz.

Solís, Felipe

1989　Un nuevo cuauhxicalli descubierto en la Ciudad de México. *Boletín Informativo del Museo Nacional de Antropología,* Año II, Vol.4: 10-11.

Solís, Felipe y Roberto Velasco Alonso

2004　Testimonios arqueológicos sobre el culto solar em México prehispánico. En *El Calendario Azteca y otros monumentos solares.* Editado por Eduardo Matos y Felipe Solís, pp. 74-147. CONACULTA/ INAH/Editorial Arabache.

Tena, Rafael

2002　*Mitos e historias de los antiguos nahuas.* CONACULTA.

Townsend, Richard Fraser

1979　*State and Cosmos in the Art of Tenochtitlan.* Dumbarton Oaks. Trustees for Harvard University.

Umberger, Emily

1984　El trono de Moctezuma. *Estudios de Cultura Náhuatl* 17: 63-87.

1993　Art and Imperial Strategy in Tenochtitlan. In *Aztec Imperial Strategies.* Edited by Berdan, Frances et al., pp. 85-106. Dumbarton Oaks.

1998　New Blood from an Old Stone. *Estudios de Cultura Nahuatl* 28: 241-256.

2008　Ethnicity and Other Identities in the Sculptures of Tenochtitlan. In *Ethnic Identity in Nahua Mesoamerica.* Edited by Berdan, Frances et al., pp. 64-104. The University of Utah Press.

VanEssendelft, Willem M.

2011　*The Word Made Stone: Deciphering and Mapping the Glyphs of Tizoc Stone.* A Thesis in the Field of Anthropology and Archaeology for the Degree of Master, Harvard University.

Wicke, Charles

1976　Once More around the Tizoc Stone. A Reconsideration. *Actas del 41 Congreso Internacional de Americanistas*, tomo 2, pp. 209-222.

Wright Carr,David Charles

2009　Semasiografía y glotografía en las inscripciones de dos esculturas mexicas. En *Estudios acerca de las Artes, Análisis, Técnicas y Reflexión.* Editado por Benjamín Valdivia, pp. 226-253. Universidad Guanajuato.